

令和4(2022)年度 資源評価調査報告書(新規拡大種)

種名	カミナリイカ	対象水域	九州北・西 (福岡・佐賀・熊本海域)
担当機関名	水産研究・教育機構 水産資源研究所 浮魚資源部、福岡県水産海洋技術センター、佐賀県玄海水産振興センター、熊本県水産研究センター	協力機関名	

1. 調査の概要

福岡県、佐賀県、熊本県が過去に遡ってまとめた主要港の月別漁業種別水揚げ量をもとに、本種の月別・年別の漁獲量を求め主漁期を調べた。また、各県の漁獲量集計値の変動から、現在の資源の水準および動向を判断した。

2. 漁業の概要

本種は主にイカかごで漁獲される。漁獲量は主要港(漁協)による集計であり、各県の総計ではない。集計した範囲では、佐賀県と熊本県が多く、福岡県で少ない(図1)。データのある2012年以降では、3県合計で13~47トンの間で推移し、2021年は20トンであった。データを集約した期間が短く、かつ主要港(漁協)による漁獲量であるので、資源の水準および動向は不明である。

2021年の月別の漁獲量をみると4~6月に多く、夏季(7~9月)に少ない(図2)。

3. 生物学的特性

- (1) 分布・回遊：日本近海では、房総半島以南の主に太平洋側に棲息。朝鮮半島南部、東シナ海、南シナ海などにも分布しているとされるが、詳細は不明。
- (2) 年齢・成長：不明だが、1年で成魚になると考えられる。2021年に測定をしたカミナリイカの外套背長組成をみると230mm台のものが多かった(図3)。
- (3) 成熟・産卵：南日本では4~7月に成熟する(Natsukari and Tashiro 1991)。2021年に測定をしたカミナリイカのGSIをみると雌で6、7月に高い傾向にあった。
- (4) 被捕食関係：不明だが、カミナリイカは魚食性と考えられる。

4. 資源状態

上述のように福岡県・佐賀県・熊本県の漁獲量が揃ったのは2012年からである。また各県の全ての漁獲量が集計されているわけではない。したがって、これらの県の漁獲量は資源状態を反映しているわけではないと考えられる。そのため、資源水準および動向は不明とする。

5. 資源回復などに関するコメント

資源回復のための取り組みは行われていない。生物特性や資源構造に不明な点が多く、さらなる情報収集が必要である。

6. 引用文献

Natsukari, Y. and M. Tashiro (1991) Neritic squid resources and cuttlefish resources in Japan. Mar. Behav. Physiol., **18**, 149-226.

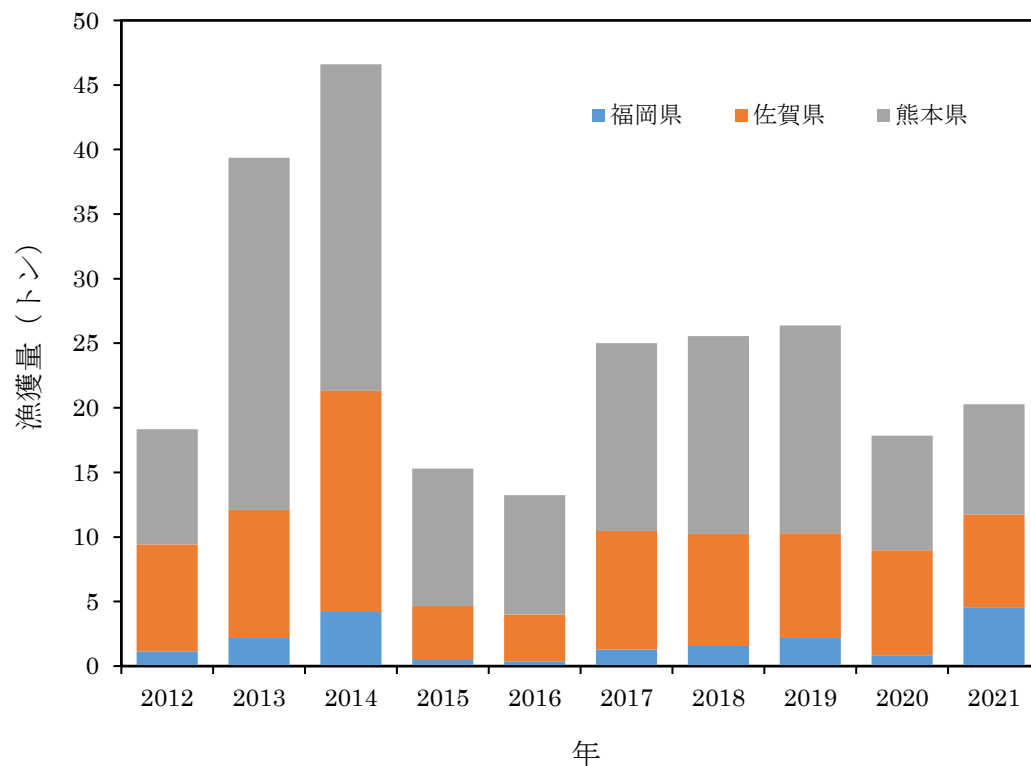


図1. カミナリイカの県別漁獲量。すべての県で集計がある2012年以降のグラフを示す

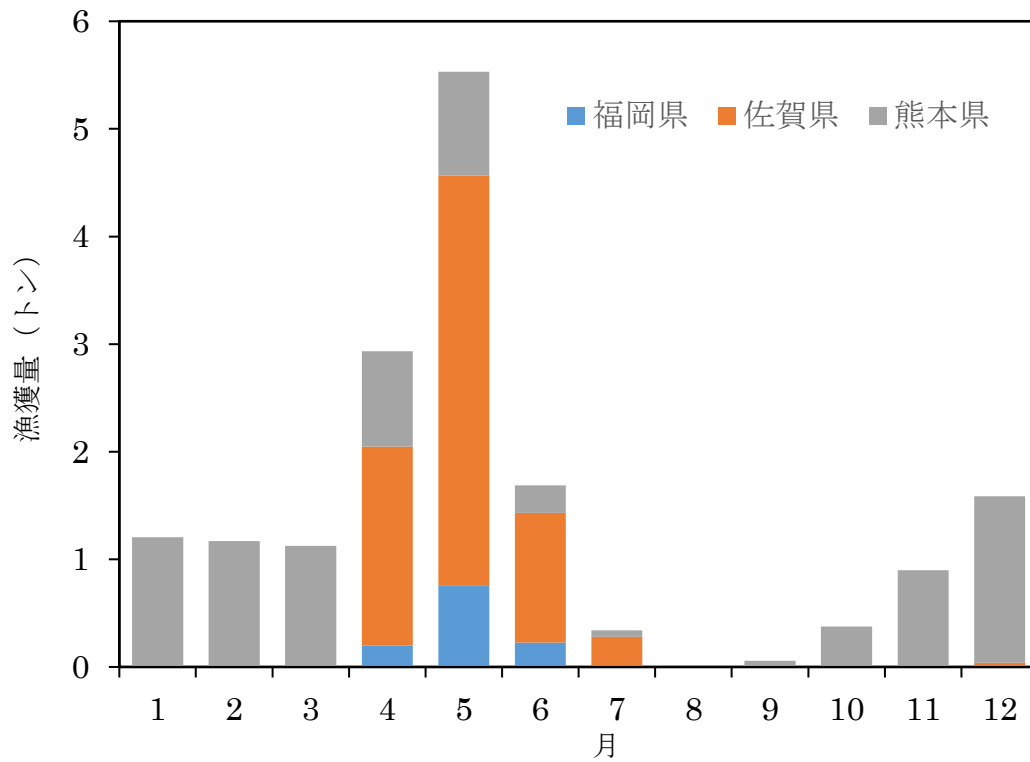


図2. 福岡県・佐賀県・熊本県におけるカミナリイカの月別漁獲量 (2021年)

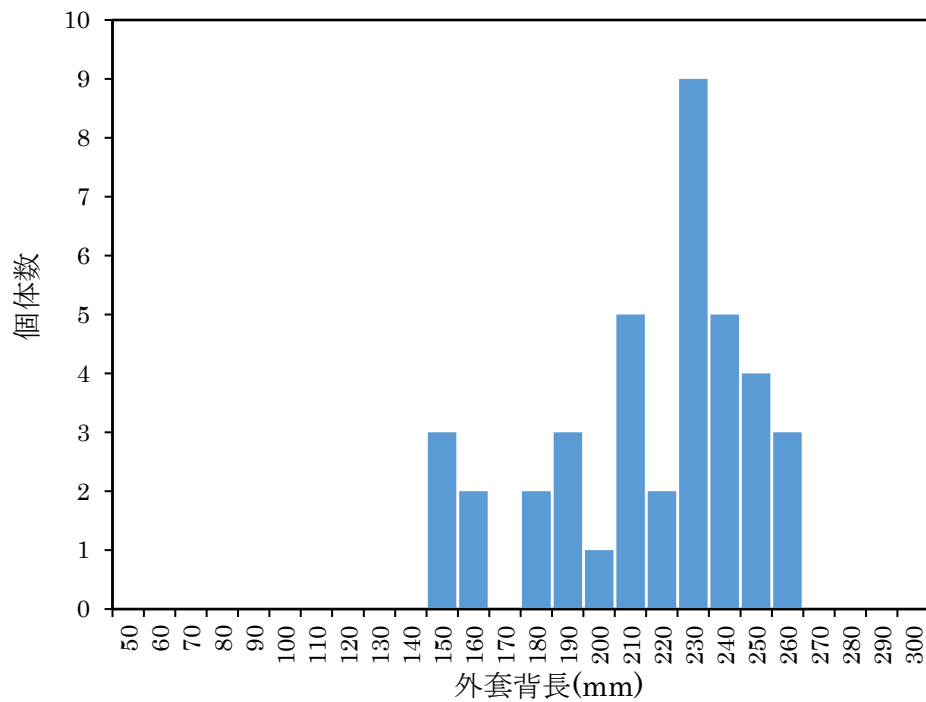


図3. 2022年に測定をしたカミナリイカの外套背長組成

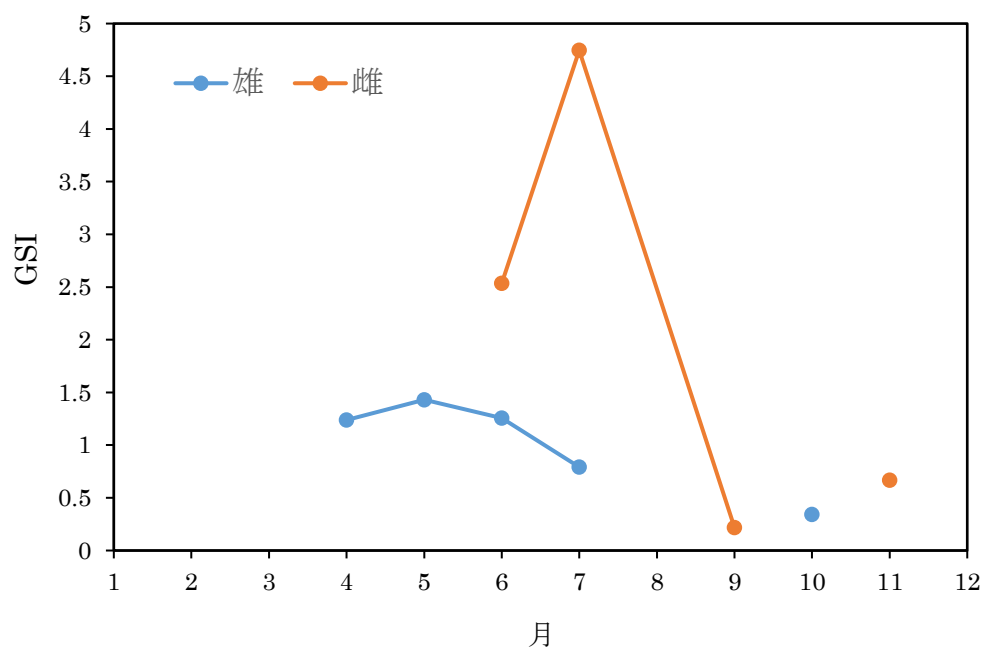


図4. 2022年に測定をしたカミナリイカの月別GSI（生殖腺体重指数）

表1. 各県の漁獲量（トン）の年変化

年	福岡県	佐賀県	熊本県
2012	1.14	8.28	8.92
2013	2.18	9.91	27.26
2014	4.19	17.12	25.28
2015	0.54	4.11	10.63
2016	0.38	3.60	9.26
2017	1.30	9.15	14.56
2018	1.56	8.68	15.32
2019	2.18	8.12	16.09
2020	0.84	8.14	8.86
2021	4.56	7.18	8.53